

教職課程履修学生の自尊感情、ソーシャルスキルが 適応感に及ぼす影響

曾山和彦
教職センター

Self-Esteem , Social Skills , Adjustment : The student who
studies the teacher-training course

Kazuhiko Soyama
Center for Teacher Education

The purpose of the present study was to measure characteristics of the self-esteem, social skills, and adjustment of the student who studies the teacher-training course, in order to investigate the relationship of their self-esteem and social skills to their adjustment. 296 students completed a questionnaire. The results were as follows: (1) The self-evaluation of the junior is the highest. (2) self-esteem and social skills to be related to their adjustment. (3) A freshman and a sophomore; social skills are more strongly than self-esteem related to their adjustment. (4) A junior and a senior; self-esteem is more strongly than social skills related to their adjustment.

Keyword : self-esteem, social skills, adjustment, teacher-training course

1. 問題と目的

本学で教職課程を履修する学生は毎年約 250 ~ 300 名であり、本学学生全体の約 8 ~ 9 % を占めている。教員採用試験に現役で合格する学生も近年増えており、過去 3 年間の現役合格実績は、平成 20 年度 10

名、21 年度 16 名、22 年度 25 名となっている。このように卒業後すぐに教壇に立つ学生が増えてきていることを喜ばしく思うとともに、一方では杞憂する面もある。日々、生徒の前に立ち続ける教師は、生徒にとって最も身近なモデルである。教師の表情、

立ち居振る舞い等が、大きな影響力を伴って生徒に伝わっていく。「自分のことを大切に」と教える教師が自分自身を大切にする姿を見せなければどうなるだろうか。「挨拶を大切に」と教える教師がしっかりと挨拶をする姿を見せなければどうなるだろうか。「人の話をしっかりと聴くように」と教える教師が生徒の話をうわの空で聴いていたらどうなるだろうか。生徒は、教師の言葉以上に、立ち居振る舞いを見て学ぶのである。

「自分を大切にすることができる」ということは、自己評価の感情である「自尊感情」(遠藤¹⁾.1999)がほどよく育まれているということである。また、「挨拶をする・人の話を聴くことができる」ということは、対人関係のコツ・技術である「ソーシャルスキル」(小林²⁾.2001)が身につけているということである。自尊感情、ソーシャルスキルのいずれも、人とかかわりの中で生まれ、身につくものである。現代の子どもたちが、様々な研究知見、学校や家庭現場の実践の中で、自尊感情、ソーシャルスキルの乏しさ・弱さを指摘されるのは、以前に比べ、人とかかわりの機会が格段に減ったことに原因の一つがあることは確かなものであると思われる。

石川³⁾(2007)は、小学校4年から中学1年までの児童生徒を対象にソーシャルスキル・学校適応感の変容を調査としたところ、学年進行に伴い、ソーシャルスキルも学校適応感も低下することを明らかにした。このことから、石川は、「ソーシャルスキルは自然経過の中では育まれない」と指摘している。この石川の指摘は、現代の子どもたちの姿を理解するために、さらに今後の学校や家庭における教育の在りようの方向性を示唆するものであると考えられる。

自尊感情、ソーシャルスキルの乏しさ・弱さは、実は子どもに限ったことではない。自分を大切にできなければ、他者を大切にすることは難しい。今、耳を疑うような悲惨な事件が起こるのは自分を大切にできない、自尊感情の乏しさが引き金になってい

るケースも多々あろう。また、対人関係のコツ・技術であるソーシャルスキルが十分身につけていないために、対人関係がぎくしゃくしたり、トラブルにつながったりというケースが頻発しているのではないかとと思われる。

教職課程履修学生の講義を担当する中で気になるのも、これまで述べてきた自尊感情、ソーシャルスキルの問題である。自分に自信が持てず、おそらく自尊感情が低いだろうと思われる学生が多く見受けられる。また、簡単な話し合い活動やロールプレイ等にもスムーズに取り組むことができず、おそらくソーシャルスキルが乏しいだろうと思われる学生も少なくない。こうした学生が、4年次には確実に教育実習生として生徒の前に立ち、卒業後にはすぐに教壇に立つ学生がいることを考えれば、学生の自尊感情、ソーシャルスキルの問題は、教職課程担当者としては見逃せない喫緊の課題である。

自尊感情、ソーシャルスキルは、先行研究の知見として、ストレス反応や適応感に影響を及ぼす重要な要因として指摘されている(川西⁴⁾.1995、岩上他⁵⁾.1998、大久保・青柳⁶⁾.2005、曾山⁷⁾.2008)。こうした知見を裏付けるように、自尊感情、ソーシャルスキルの乏しさ・弱さが見受けられる学生には、大学生活にうまく適応できていないのではないと思われる表情や態度もまた見受けられる。

以上、述べてきたことは、先行研究の知見によるエビデンスを示したものもあれば、筆者自身の観察を通じた推測によるものもある。そこで、本研究では、教職課程履修学生の自尊感情、ソーシャルスキル、適応感の実態及び各要因間の関係性を明らかにするとともに、今後の学生指導に対する示唆を得ることを目的とする。具体的には、教職課程履修学生1年生から4年生に対し、自尊感情、ソーシャルスキル、適応感を測定する客観尺度を用い、質問紙調査を実施する。収集データの分析をもとに考察を加え、より明確なエビデンスを提示したいと考えている。

2. 方法

2-1. 調査対象

調査対象は、本学教職課程を履修している1年から4年までの学生296名(男子171名、女子122名、不明3名)。学年別内訳は1年生76名(男子45名、女子28名、不明3名)、2年生76名(男子39名、女子37名)、3年生77名(男子43名、女子34名)、4年生67名(男子44名、女子23名)であった。

2-2. 調査時期

2010年10月。教職課程の履修授業・ゼミ中に質問紙を配布し、10分間の回答時間後、回収した(回収率100%)。なお、質問紙は個人の特定ができないよう、無記名とした。

2-3. 測定具

質問紙は、Rosenberg⁸⁾(1965)の「自尊感情尺度」、菊池⁹⁾(2007)の「KiSS-18」、大久保¹⁰⁾(2005)の「青年用適応感尺度」の3尺度から構成した。

自尊感情尺度(Table1)は、自分自身に対する評価感情を測定するものであり、10項目から構成される。具体的には、「以下の項目は、現在の自分の状態や気持ちにどの程度当てはまりますか」という教示に対して、4件法(まったくそう思わない;1~いつもそう思う;4)で回答を求めた。逆転項目については、データを統計処理する際に、得点を逆配点(4点 1点、3点 2点、等)とした。自分自身、自尊感情を高く認知しているほど、高得点になるように設定されている。なお、得点の範囲は、10点から40点である。

KiSS-18(Table2)は、対人関係を円滑にするスキルを総合的に測定するものであり、18項目から構成される。具体的には、「あなたの日頃の行動を考えたとき、以下の項目はどれくらい当てはまりますか」という教示に対して、5件法(いつもそうでない:1

~いつもそうだ:5)で回答を求めた。自分自身、ソーシャルスキルを高く認知しているほど、高得点になるように設定されている。なお、得点の範囲は、18点から90点である。

青年用適応感尺度(Table3)は全30項目から構成される。周囲にとけ込め、なじめていることから生じる気楽さ、快適さ、居心地の良さの感覚を表す11項目からなる「居心地の良さの感覚」、課題や目的があることによる充実感を表す7項目からなる「課題・目的の存在」、周囲から信頼され、受容されている感覚を表す6項目からなる「被信頼・受容感」、周囲との関係による劣等感を表す6項目からなる「劣等感の無さ」から構成される。具体的には、「あなたは大学生活を考えたとき、日頃どのように感じていますか」という教示に対して、5件法(全く当てはまらない:1~非常によく当てはまる:5)で回答を求めた。データを統計処理する際に、「劣等感の無さ」は逆転項目として、得点を逆配点(5点 1点、4点 2点、等)とした。自分自身、大学生活への適応を高く認知しているほど、高得点になるように設定されている。なお、各下位尺度の得点の範囲は、「居心地の良さの感覚」が11点から55点、「課題・目的の存在」が7点から35点、「被信頼・受容感」が6点から30点、「劣等感の無さ」が6点から30点である。

3. 結果

本調査集計にあたり、項目に未記入のあるものと全項目に同じ選択肢を回答してあるものを除いた。その結果、有効サンプル数は、学生268名(男子155名、女子113名)であった。学年別内訳は1年生61名(男子35名、女子26名)、2年生72名(男子39名、女子33名)、3年生69名(男子38名、女子31名)、4年生66名(男子43名、女子23名)であった。

3-1. 教職課程履修学生の自尊感情、ソーシャルスキル、適応感の現状

3-1-1. 学年別比較

教職課程履修学生の自尊感情、ソーシャルスキル、適応感、適応感下位尺度（居心地の良さの感覚、課題・目的の存在、被信頼・受容感、劣等感の無さ）に学年差があるのかどうかを明らかにするために、各学年の比較を行った。1年生から4年生の別に、各尺度得点の平均得点と標準偏差を算出し、1要因4水準の分散分析を行った（Table4）。

自尊感情は分析の結果、条件の効果が有意（ $F(3, 264) = 3.19, p < .05$ ）であったことから、多重比較を行ったところ、3年生は2年生、1年生に比べて自尊感情が高いことが明らかになった。

ソーシャルスキルは分析の結果、条件の効果が有意（ $F(3, 264) = 4.58, p < .01$ ）であったことから、多重比較を行ったところ、3年生は2年生、1年生に比べてソーシャルスキルが高いことが明らかになっ

た。

適応感下位尺度の「被信頼・受容感」は分析の結果、条件の効果が有意（ $F(3, 264) = 3.28, p < .05$ ）であったことから、多重比較を行ったところ、3年生は他学年に比べて適応感が高いことが明らかになった。

適応感下位尺度の「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「劣等感の無さ」は分析の結果、条件の効果が有意ではなく、学年間の差が認められなかった。

Table4 学年別自尊感情、ソーシャルスキル、適応感、適応感下位尺度平均得点

	1年 N = 61	2年 N = 72	3年 N = 69	4年 N = 66	F 値
自尊感情	24.67(4.51)	24.61(4.98)	26.88(5.00)	25.77(5.32)	3.19*
	3年 > 2年**, 3年 > 1年*				
ソーシャルスキル	54.59(10.69)	54.85(10.58)	60.55(11.23)	57.97(10.93)	4.58**
	3年 > 2年**, 3年 > 1年**				
適応感	103.00(17.10)	102.92(17.79)	111.90(20.35)	106.32(21.27)	3.28*
	3年 > 4年†、3年 > 2年**, 3年 > 1年**				
居心地の良さの感覚	38.93(8.47)	39.63(8.42)	42.06(9.67)	40.33(9.29)	1.49
課題・目的の存在	26.18(5.76)	25.61(5.95)	27.84(5.77)	26.38(6.68)	1.71
被信頼・受容感	17.21(4.04)	17.36(5.47)	19.74(5.19)	18.11(5.59)	3.44*
	3年 > 4年†、3年 > 2年**, 3年 > 1年**				
劣等感の無さ	20.67(3.53)	20.32(4.51)	22.26(4.35)	21.50(5.44)	2.55

() 内は標準偏差 * $p < .05$ ** $p < .01$

3-2. 教職課程履修学生の適応感に対する自尊感情、ソーシャルスキルの影響

教職課程履修学生の適応感に対する自尊感情、ソーシャルスキルの影響を明らかにするために、適応感を従属変数、自尊感情、ソーシャルスキルを独立変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った（Table6）。ステップワイズ法は段階的重回帰分析とも呼ばれ、用意された独立変数の中から統計的に有意な影響を持つもの

のみが、従属変数に対する寄与の大きい順に1つずつ選択的に投入される方法である。本研究では、 $p < .05$ の有意水準で選択投入を行った。以下、パス図中の双方向矢印の数値は Pearson 相関係数、片方向矢印の数値は標準偏回帰係数 ()、従属変数の右上に記載した数値は、決定係数 (説明率) R^2 である。

3-2-1 . 全体

自尊感情とソーシャルスキルの適応感に対する影響は、決定係数が.48 であることから、自尊感情とソーシャルスキルの 2 要因により適応感を 48 % の率で説明できることが明らかになった。標準偏回帰係数については、自尊感情 (=.42) が有意な正の影響力 ($t=7.53$ 、 $p<.01$)、ソーシャルスキル (=.35) も有意な正の影響力 ($t=6.25$ 、 $p<.01$) をもつことが示された。自尊感情とソーシャルスキルの間には中程度の相関があることが示された。標準偏回帰係数の数値から、ソーシャルスキルよりも自尊感情の方が適応感を高めることに影響を及ぼすということが明らかになった。

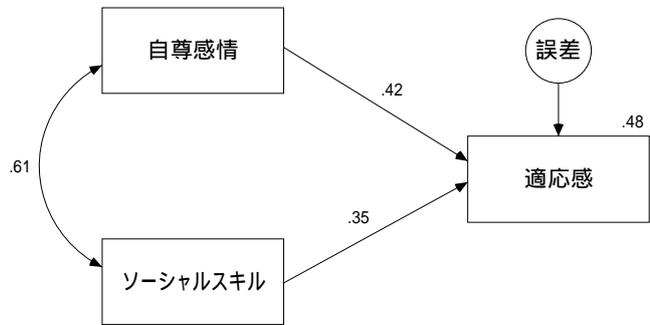


Fig.1 適応感に対するパス解析 (全体)

3-2-2 . 1年生

自尊感情とソーシャルスキルの適応感に対する影響は、決定係数が.42 であることから、自尊感情とソーシャルスキルの 2 要因により適応感を 42 % の率で説明できることが明らかになった。標準偏回帰係数については、自尊感情 (=.36) が有意な正の影響力 ($t=3.15$ 、 $p<.01$)、ソーシャルスキル (=.40) も有意な正の影響力 ($t=3.49$ 、 $p<.01$) をもつことが示された。自尊感情とソーシャルスキルの間には中程度の相関があることが示された。標準偏回帰係数の数値から、自尊感情よりもソーシャルスキルの方が適応感を高めることに影響を及ぼすということが明らかになった。

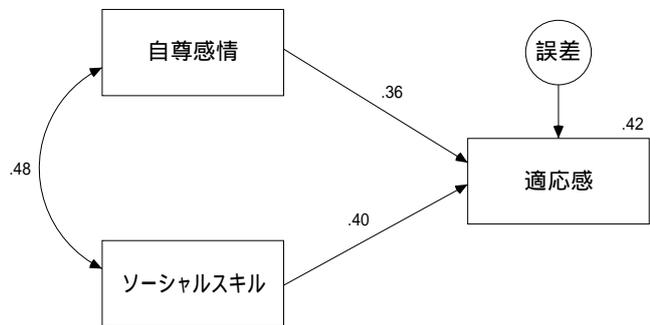


Fig.2 適応感に対するパス解析 (1年生)

3-2-3 . 2年生

自尊感情とソーシャルスキルの適応感に対する影響は、決定係数が.41 であることから、自尊感情とソーシャルスキルの 2 要因により適応感を 41 % の率で説明できることが明らかになった。標準偏回帰係数については、自尊感情 ($\beta = .33$) が有意な正の影響力 ($t=2.74$ 、 $p<.01$)、ソーシャルスキル ($\beta = .37$) も有意な正の影響力 ($t=3.10$ 、 $p<.01$) をもつことが示された。自尊感情とソーシャルスキルの間には中程度の相関があることが示された。標準偏回帰係数の数値から、自尊感情よりもソーシャルスキルの方が適応感を高めることに影響を及ぼすということが明らかになった。

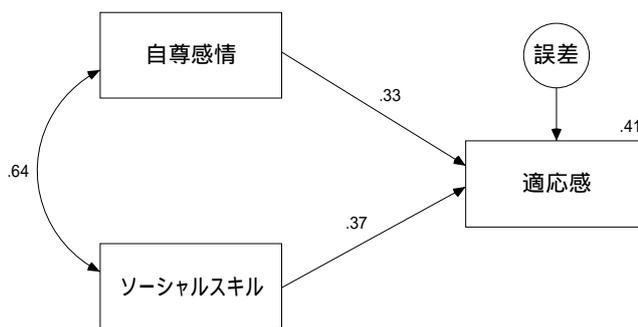


Fig.3 適応感に対するパス解析 (2 年生)

3-2-4 . 3年生

自尊感情とソーシャルスキルの適応感に対する影響は、決定係数が.46 であることから、自尊感情とソーシャルスキルの 2 要因により適応感を 46 % の率で説明できることが明らかになった。標準偏回帰係数については、自尊感情 ($\beta = .46$) が有意な正の影響力 ($t=4.24$ 、 $p<.01$)、ソーシャルスキル ($\beta = .30$) も有意な正の影響力 ($t=2.73$ 、 $p<.01$) をもつことが示された。自尊感情とソーシャルスキルの間には中程度の相関があることが示された。標準偏回帰係数の数値から、ソーシャルスキルよりも自尊感情の方が適応感を高めることに影響を及ぼすということが明らかになった。

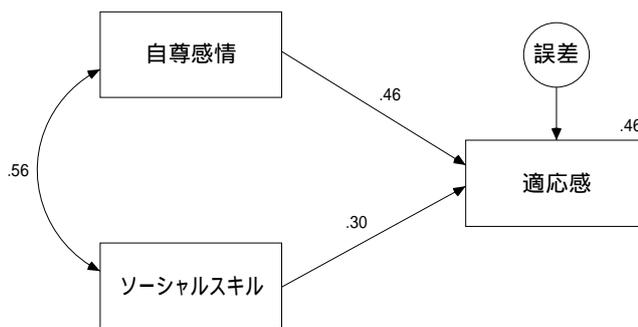


Fig.4 適応感に対するパス解析 (3 年生)

3-2-5 . 4年生

自尊感情とソーシャルスキルの適応感に対する影響は、決定係数が.54 であることから、自尊感情とソーシャルスキルの 2 要因により適応感を 54 % の率で説明できることが明らかになった。標準偏回帰係数については、自尊感情 ($\beta = .49$) が有意な正の影響力 ($t=4.33$ 、 $p<.01$)、ソーシャルスキル ($\beta = .32$) も有意な正の影響力 ($t=2.84$ 、 $p<.01$) をもつことが示された。自尊感情とソーシャルスキルの間には中程度の相関があることが示された。標準

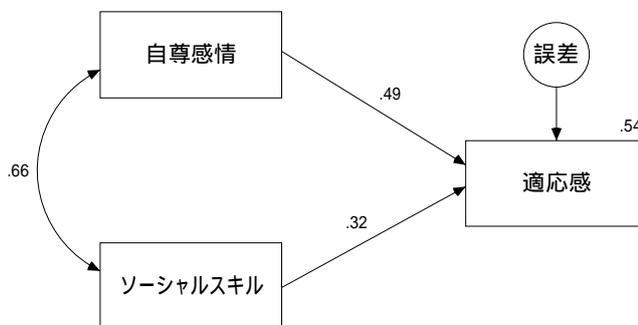


Fig.5 適応感に対するパス解析 (4 年生)

偏回帰係数の数値から、ソーシャルスキルよりも自尊感情の方が適応感を高めることに影響を及ぼすということが明らかになった。

Table-5 自尊感情、ソーシャルスキルから適応感への重回帰分析結果

	適応感				
	全体	1年	2年	3年	4年
自尊感情	.42**	.36**	.33**	.46**	.49**
ソーシャルスキル	.35**	.40**	.37**	.30**	.32**
R ²	.48**	.42**	.41**	.46**	.54**

* $p < .05$, ** $p < .01$

4. 考察

4-1. 教職課程履修学生の自尊感情、ソーシャルスキル、適応感の現状

本研究では、教職課程履修学生の自尊感情、ソーシャルスキル、適応感の現状について明らかにするため、学年別比較を行った。

分散分析の結果、自尊感情、ソーシャルスキル、適応感について、3年生の得点が他学年に比べ、有意に高いことが明らかになった。先行研究の中では、自尊感情については、河内¹¹⁾(2005)が大学生を対象にした調査結果から「学年が上がるごとに尺度得点が高くなる」と示している。ソーシャルスキルについては、菊池⁹⁾(2004)が高校生、短大生、大学生、一般成人を対象にした調査結果、曾山⁷⁾(2008)が本学教職課程履修学生を対象とした調査結果から「学年が上がるごとに尺度得点が高くなる」と示している。適応感については、大久保・青柳⁶⁾(2005)が中学生、高校生、大学生を対象にした調査結果から「概して学校段階が上がるほど尺度得点が高くなる傾向が見られた」と示している。曾山の調査結果では4年生が他学年より高得点である点は、大久保・青柳の結果に一致したが、一方で4年生に次いで1年生の得点が高いことが相違点として示された。このように先行研究との比較から、本研究結果の特徴と考えられるのは、4年生の得点が低下していることである。この点について、特に対象者、使用尺度に類似性の

高い曾山の研究と比較すると、調査時期の違いが結果に反映されたのではないかと考えられる。曾山の研究では質問紙調査の実施が7月であったのに対し、本研究は10月であった。10月という時期は、教員採用試験の合否が既に判明した時期である。本研究の対象である4年生66人のうち、合格した学生は約10名である。採用試験の結果が学生の心理面に影響を及ぼし、自尊感情、ソーシャルスキル、適応感に対する自己評価の低下につながったのではないかと考えられる。

4-2. 教職課程履修学生の自尊感情、ソーシャルスキルが適応感に及ぼす影響

本研究では、先行研究の知見から、適応感に影響を及ぼす変数として自尊感情、ソーシャルスキルの2変数を設定し、重回帰分析による検討を試みた。

結果から、自尊感情とソーシャルスキルはいずれも、適応感に対する高い影響力をもつことが明らかになった。このことは、川西⁴⁾(1995)、岩上⁵⁾(1998)による自尊感情とストレス反応の関係を検討した研究、曾山⁷⁾(2008)による適応感に対するソーシャルスキルの影響を検討した研究の知見に一致するものであった。また、学年別に分析した結果からは、1,2年生はソーシャルスキルの方が自尊感情よりも適応感に対して高い影響力をもつこと、逆に3,4年生は自尊感情の方がソーシャルスキルよりも適応感に対

して高い影響力をもつことが明らかになった。すなわち、1, 2 年生に対してはソーシャルスキルを高める指導・支援を、3, 4 年生に対しては自尊感情を高める指導・支援を行うことで、大学生生活に対する適応感が高まるということである。このことは、教職課程履修学生にかかわる教員、キャリア支援担当者、事務担当者等が留意すべき大切なポイントであると考えられる。例えば、講義を担当する教員であれば、知識伝達に加え、自尊感情、ソーシャルスキルを高めるための工夫をするなどが考えられよう。自尊感情、ソーシャルスキルの向上には、人とのかかわりが不可欠であることから、今、大学現場でも増えつつある参加型授業の実践(関田¹²⁾ 2005、曾山¹³⁾ 2009、曾山¹⁴⁾ 2010) が一つのヒントになるのではないかと考えられる。

4-3. 今後の課題

ほどよい自尊感情とバランスのよいソーシャルスキルが身についた学生であれば、将来教職に就いたとき、子ども、保護者、同僚ともよい関係を保ちながら、職務を遂行することができると思われる。教職課程履修学生にかかわる者の一人として、学生の自尊感情、ソーシャルスキルを高める指導・支援の在り方を検討することを引き続き課題としたい。具体的には、「担当する授業において参加型授業実践を積み上げ、その効果を検証すること」、「現場教員と学生が共に学ぶ学習会を定期的を開催し、その効果を検証すること」である。

5. 参考文献

- 1) 遠藤由美 1999 「自尊感情」 中島義明編「心理学辞典」 有斐閣 343
- 2) 小林正幸 2001 学級再生
- 3) 石川信一・山下朋子・佐藤正二 2007 児童生徒の社会的スキルに関する縦断的研究 カウンセリング研究 40 38-50

- 4) 川西陽子 1995 セルフエスティームと心理的ストレスの関係 健康心理学研究 Vol8 22-30
- 5) 岩上高志・戸ヶ崎泰子・嶋田洋徳・坂野雄二 1998 中学生のセルフエスティームに関する研究 2 ~セルフエスティームと学校ストレスの関係 日本心理学会第 62 回論文集 963
- 6) 大久保智生・青柳肇 2005 大学新入生の適応に関する研究-社会的スキルは後の適応を予測するのか? - 人間科学研究,18, 207-213
- 7) 曾山和彦 2008 教職課程履修学生の社会的スキルと適応感 名城大学年報第 2 号 32-41
- 8) Rosenberg,M. 1965 Society and the adolescent self-image.Princeton University Press,Princeton,NJ. 星野命訳(1970)感情の心理と教育(一,二). 児童心理 24 1264-1283, 1445-1477
- 9) 菊池章夫 2007 社会的スキルを測る: KiSS-18 ハンドブック 川島書店
- 10) 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因 - 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 - 教育心理学研究 53 307-319
- 11) 河地和子 2005 自信力が学生を変える,60-63
- 12) 関田一彦 2005 集中講義「教育心理学」が受講者の心理的態度に与える影響 創価大学教育学部論集, 56, 研究ノート, 71-78
- 13) 曾山和彦 2009 参加型授業を受講した学生の満足度と学習意欲に関する考察 名城大学年報第 3 号 13-20
- 14) 曾山和彦 2010 学習意欲を高める授業改善の検討~構成的グループエンカウンターを活用した「教養演習」の実践~ 名城大学年報第 4 号 10-18